

も、むしろ負担〔度〕の方である」³⁴⁾と見ている。「女性は働け」、「仕事を持って自立せよ」と煽られ、その考えに感染した女性は「子どもが負担」だという感覚にとらわれ、専業主婦だけでなく、結婚していない若い女性の間さえ「子どもを育てるのはたいへんだ」との感覚が広がっている。そこで「この〔子ども=負担〕という感覚こそが、女性に子どもを生むのをためらわせる最大の理由なのだ」³⁵⁾と主張している。

さらに教授はカウンセリングを引受けている女性の心理を分析した結果「現代の若い女性たちにも同様の〔本能的・母性的次元を嫌う心理〕が非常に強い」³⁶⁾と判断している。

4) 保育所神話の犠牲者のディレンマ

教授によると今の若い女性たちは保育所で育てられたみじめな体験を振り返って、同じようにしか育てられないのなら、子どもが可愛想だと考えているから、生みたくないと考えている。そこで彼女達は「子どもは物理的な世話さえしてやれば誰の手によって育てても変わらない」³⁷⁾と考えてきたことの犠牲だと言えるという。

この世代が「じっさいに子どもを生む年齢になってきて、一方ではやっぱり子どもには母性が必要だ、愛情が必要だと反省をし、しかし他方では100%家庭に入って専業主婦になることにも踏み切れない、というジレンマに陥っている」³⁸⁾のだという。

5) 母性本能の重要性

このようなジレンマに陥るのは、家庭的なことや子育てを低くみて、文化的なことや仕事の方こそ価値の高いものだという思想に洗脳されたことによる。そうなると子どもを持ちたなくなるのは至極当然のことである。

林教授によると「今の若い女性たちが子どもを生みたがらないのは彼女たちの心の中から母性が

消えているからである。そもそも、単純に、子どもが可愛いとか、子どもがほしいという気持ちそのものが、弱くなっているのである。それはとりもなおさず、母性が消失しているということ」³⁹⁾なのである。

そして「母性というものは、誰にでも自動的に出てくるものではない。本能としての母性さえ、必要な条件が整わないと、出てこないものである」⁴⁰⁾と林教授は説いている。

このように見てくると、少子化現象の根底には「男が悪いだの、制度が悪いだの」という表面的な問題よりも、母性そのものが壊されつつあるという、もっと深く恐ろしい事態が進行しているのである。少子化の最も根本的な原因は、母性そのものの消失⁴¹⁾という問題がひそんでいると林教授は主張している。

6) 「働け」イデオロギーの再考

何故このような恐ろしい事態が生まれたのか、その主な理由は「働けイデオロギー」の感染にあると考えられる。林教授は「母親が働いていると、家庭の中は殺伐としてくる。戦争のようだとも言われている。家庭にうるおいがなくなり、子どもの問題行動が増える。大人の自殺も増えている。崩壊し孤立化した人々のための社会的補助が必要になり、ますます税金は高くなり、それがまた家庭の平安を脅かす。出口のない悪循環である。どんな不摂生をした結果であろうが、どんなに怠けた結果であろうが、すべての〔弱者〕を悪平等的に福祉の対象にするという原理と、〔働け〕イデオロギーとが、手を結んだ結果の悪循環である。」⁴²⁾と指摘し、これらの悪循環を避けるためには、その前提（「女性の自立」＝「外に出て働く」＝「女性の幸せ」という単線的な図式）を考え直す必要があると説いている。

このように林教授は少子化の本質を経済的条件

34) 林道義「女が子供を生まない本当の理由」読売新聞社『This is 読売』1998年9月号 213頁

35) 同上 213頁

36) 同上 214頁

37) 同上 215頁

38) 同上 215頁

39) 同上 215頁

40) 同上 215頁

41) 同上 216頁

42) 同上 217頁